

独立印度と対中関係の変遷

二十世紀日本アジア協会常務理事 岡本幸治
(大阪国際大学名誉教授)

平成30年11月号(259号)
(皇紀2678年) 毎月1日発行

新風

編集人 瀬戸 開

発行人 魚谷 哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
http://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org



印度の独立と中国

印度が長い英国の植民地配から英連邦自治領のひとつとして独立を認められたのは、日本がポツダム宣言を受け入れ大東亜戦争に終止符を打った時から丁度二年後の一九四七年八月十五日のことである。中国大陸においては、対日戦争終了後に進出した国共内戦に勝利した中共が、一九四九年一〇月に中華人民共和国を設立した。かつて世界の歴史と文化に大きな足跡を残したアジアの二大國が、近代以降の混乱期からようやく脱却し、第二次世界大戦後展開してきた国家関係の変遷を印度側から見ると、大きく三期に分けることができる。

第一期 友好期

一九五〇年代中頃まで

一九五四年四月に北京で調印された「印度と中国・チベット間の通商・交流に関する協定」の前文に掲げられた「平和原則」は、①領土保全と主権の相互尊重②相互不侵略③相互の内政への不干渉④平等および互恵⑤平和的共存、を謳ひあげ、両國の友好関係を象徴するものであった。その後周恩来首相が訪印してネルー首相と共同声明を発した時には「この五原則は印中二國間にとどまらず政治経済体制を異にするあらゆる國家間の友好平和関係を確立するための普遍的法則である」と強調してある。

第二期 関係破綻・敵対期

一九五〇年代末〜八〇年代

このころのやうな蜜月関係は、一九五〇年代の終はり頃になると早くも暗転し始めてきた。大きな問題が二つあった。第一はチベット問題である。独自の宗教と文化を持つ独立王国チベットは、清國軍の侵略により十八世紀後半以後は清帝國を宗主國としていたが、内政はダライラマ政庁が掌握して来た。ところが二十世紀に入ると、チベットの實質的支配者は、日清戦争で「小日本」に敗れた清國でなく英国になつて来た。国共内戦でラサ駐在の中華民國代表は退去を命じられた。残る代表は英国支配の跡を継ぎ独立印度だけであり、その印度はチベットの独立を支持して来たのである。

第三期 関係改善模索期

一九九〇年代以降

南進行動をソ連と共に支持した。反撃した國連軍が中国國境に迫つてきたとき、中国は大々的な北朝鮮支援の軍事介入を行ひ、米國などの西側諸國と対立した。その後毛沢東の中国はソ連との関係も悪化したので、大戦後の独立國からなる第三世界で影響力を拡大しようとしたが、そこでは独立印度が大きな威信を保持してゐる。その威信を打ち砕くために最も効果的な方策が、インドの弱さを示すこの軍事的敗北であつたのだ。印度の独立運動においてイスラム教徒は長らくヒンズー教徒と共同行動をとりつて来たが、最終的に共同行動の分離独立をめざして、パキスタンと、チベットの實質的支配者は、日清戦争で「小日本」に敗れた清國でなく英国になつて来た。国共内戦でラサ駐在の中華民國代表は退去を命じられた。残る代表は英国支配の跡を継ぎ独立印度だけであり、その印度はチベットの独立を支持して来たのである。

協力協定などを結んでゐる。印度の本格的な経済自由化は中国に十年余り遅れて世紀末の一九九〇年代に入り推進されることになるが、印中貿易はそれまでは僅かな國境貿易しかなく、それが急速に拡大し、二〇〇二年には日印の貿易額を追い抜き、その後も急成長を続けてゐる。一九九〇年以降は毎年のやうに兩國の要人が訪問交流を行つてゐる。二〇〇三年の印度首相の訪中では、長期的建設関係や地域的・國際的關係に関する相互協力など、兩國の關係緊密化を謳ひあげた。二〇〇五年に訪印した中国首相は關係促進のための新提案を行ひ、共同声明で兩國關係が「全面的發展段階に入った」と宣言した。中国政府の印度観は、従来の「周辺大國」から上向きに転じつつあることが見て取れる。ところが二〇一二年に中国の最高權力者として習主席が誕生してから、兩國の關係には変化が生まれつつある。習が高々と打ち上げて國際的にも注目され実施段階に入った大構想「一帶一路」がある。これは広大な大陸の東西を結ぶ「陸と海のシルクロード」を建設しようといふ提案である。経済成長率ですべて中国を抜きつつある印度は、さらなる經濟發展のためにインフラ整備が必要である。そこでこの構想に期待してさつそく加盟し、そのために必要な資金を賄ふ中国提唱の國際銀行にも中国に次ぐ資金を提供したやうであるが、その運営権・決定権は完全に中国に掌握されてゐる。

その中国が印度周辺の中小國に対して行つてゐるインフラ整備(港灣、道路など)の実情が、最近印度の不安感・危機感をかき立てるものになりつつある。南部の港灣建設で莫大な借金を負はせたスリランカからは九九年の港灣使用権を獲得し、原子力潜水艦まで寄港させてゐた事例はその一つ。これまで中国の南進を防ぐために北部國境に対する備へをしてをればよかつた印度が、北部國境沿ひのネパールやブータンだけでなく、「海のシルクロード」建設を大義名分として印度洋周辺の中小國を、今後中国の意向に従はざるを得ないやうな借金漬け國家にして、中国の政治的・經濟的拡大戦略に奉仕させる狙ひがあるといふ危機感を募らせてゐる。うかうかすると印度洋が中国海になるといふ可能性! 印中關係の今後はどうなるか。海洋國家日本にとつてもこれは他人事ではない。

る。一九五六年にインドネシアのバンドンで開催された「アジア・アフリカ會議」で出された「バンドン十原則」は、実はこの理念を敷衍したものなのである。独立後の印度において内政のみならず外交面でも決定権を有して来たのは、独立運動の英雄ガンジーのそばにあつて仕えてきたネルー首相である。彼は英國留

學中に近代西歐の様々な思想から影響を受けてをり社会主義にも好感を寄せてゐたが、植民地主義と人種主義に対しては強い反感を持ち、ソ連に対しては好意的であつた。一九五六年に起きた二つの國際的事件に対する彼の反応を見ると、英仏連合軍のエジプト出兵に対しては強く批判したが、ハンガリー動亂の際に行つたソ連の抑圧的行動には対照的な評価を行つてゐる。そして共産中國に対しては、ソ連以上に親愛感を持つてゐたのである。

近代以降に力をつけてきた新參國である西歐諸國の帝國主義により、屈辱の歴史を強いられてきたアジアの二大國であるといふ連帯感や仲間意識が、ネルーにはあつたと思はれる。彼は中國との友好關係を進めるために、ビルマに次いで共産中國を公式承認してをり、國連總會においてしばしば中國に対する好意的な見解を披瀝してゐた。一九五〇年から一九五八年に開催された國連總會では、「中國」の正式代表は、國共内戦に敗れて台湾に支配されてゐない國民黨の蔣介石政權(中華民國)ではなく、広大な大陸を支配してゐる中華人民共和國であるべきだ、といふ提案をたびたび行つてゐる。國際關係においても印度は共産中國の立場に立つて行動することが少なくなくあつたのである。

朝鮮動亂が勃発した後に開かれた一九五一年二月の國連總會で中國を「侵略者」とする決議が採用されたとき、印度はこれに反対してゐる。一九五八年九月の國連總會では、國民黨政權が支配してゐた台湾や金門馬祖などの台湾海峡の島々は、すべて中華人民共和國に返還されるべきだといふ発言まで行つてゐた。彼の意向を受けて「印中友好協會」がインド各地に設けられ、大統領や首相

しんぶうしゅう
新風驟雨
明治維新一五〇年のこの夏、山口県萩市街の松下村塾を訪ねた。周知の通り村塾は松陰神社境内にあり誠に簡素な平屋建て五〇㎡ほどの小舎である。このやうな小舎から僅か二年あまりの教育で明治維新の原動力となつた多くの志士を世に送り出したことは奇跡であらう。▼村塾内に飾られた門下生たちの肖像画や写真を眺めてみると、世に出た成功者とともに市井に隠れた非成功者をも思ひ目頭が熱くなつた。いづれも彼らが村塾で受けた質の高い教育は再び生み出され新しい世代に託された。彼らは代理不可能、掛け替へのない日本の宝であつた。▼松陰神社宝物殿で『至誠』の色紙を購入した。「誠の一字、中庸尤も明らかに之れを先発す。謹んで其の説を考ふるに、三大義あり。一に曰く実なり。二に曰く一なり。三に曰く久なり」と誠から先生の志(実行・専念・継続)が思ひ出された。▼日本人よ、自らの信念に従つて志を立て、國家危急存亡の折には覚悟を持って「夫れ志のある所、氣も亦従ふ。志氣の在る所、遠くして至るべからざるなく、難くして為すべからざるものなし」と我が目標は遠くではない。(耕)

本紙目次

- 一頁：独立印度と対中関係の変遷
- 二頁：新風ニュース 他